同窓会だより

創刊号

昭和54年8月19日

静岡県立磐田南高等学校同窓会

印刷　総合印刷㈱大進堂

ご挨拶

同窓会長　大竹節二

会員の皆様方、お元気でご活躍のこととお喜び申し上げます。昨年のこの総会で会長をお受けしもう一年経ってしまいました。この間、皆様にご協力を頂き感謝に堪えません。

今年の総会は、高校卒の若い年次の方々が多勢出席いたゞけることで例年にない盛況と思います。このことは、総会担当年次の皆様に新しい工夫と準備をお願いする訳で、そのご苦労に敬意を表する次第です。

私ども役員が前会長から引き継いでいる事に、会員名簿と機関紙の発行があります。新しい名簿には、大カラー写真を掲載し、より立派なものにしたいと計画しています。これも特定会員の寄付により、皆様には安値で配布できる見通しです。機関紙は、会員相互の意識の交流、活動の拡大、サービスの向上等になくてはならないものでしたが、ようやく発行できることになりました。喜びに堪えません。創刊号のため、やゝ規格・形式にとらわれたものになりますが、次号からは、自由な意見を盛り、ユニークな内容にしていったらと思いますので、会員の皆様のご寄稿をお待ちします。

終りに、皆様ともどもわが同窓会が益々発展することを祈願し、私のご挨拶といたします。

会報創刊を祝して

校長　安間祐一

見中、磐南高卒業生各位におかれましては、当地域のみならず、全国各地において、雄健なるご活躍をなされておりますことに敬意を表します。

このたび、同窓会本部事業として、会報第一号を発行されることになり、お喜び申しあげますと共に、お骨折りいただきました関係者に謝意を捧げるものです。

本校が、大正十一年、静岡県立見付中学校として開校して以来、五十七年を経過して、通算五十三回の卒業生が巣立っています。社会の各界における、枢要な役割を担っている卒業生が、同窓としての絆を、この会報を通して確めあうことは、まことに意議深いものと思います。会報の継続発展を祈ってやみません。

末筆になりましたが、六年間の長きにわたり在任されました橋口芳彦校長が、県立掛川西高等学校長に転出され、後任として、私が掛川東高等学校から赴任いたしました。輝かしい歴史と、地域の厚い信頼を担う本校への就任を、たいへん光栄に存じております。

微力ではありますが、校運発展のために誠意を尽くしたい所存でありますので、ご支援ご鞭撻のほどをお願いいたします。

同窓会回顧

元同窓会長　石川博敏

我が南高校同窓会は、戦後、同窓生有志相謀り、昭和二年第一回卒高橋秀男先輩を初代会長として発足した。代々会長は、一回生に限る不文律であったが、年月の経過と共に逐次繰下げて短期継承と言う事で進めて来た。私の時にその約束を破って、つい長年（五期十年）に亙ってしまった。私の第四回卒業生は、去る六月熱海で一泊の会合をもった。卒業生一二九名中三十名出席、鈴木喜市郎、涌田隆一、小林寛諸先生をお招きして、歓尽くる時を知らずと言うかたちであった。何れにせよ、年をとると共に、母校を中心として切実に郷愁を覚える時期になってしまった。

次に本校同窓会の運営については、私は地元に在住する事で終始何かと御用を仰せつかり、出来るだけの努力はして来たつもりである。卒業後三十年物故された先生及同窓生の慰霊の式もすっかり定着した。

同窓会総会の盛り上がりを期する為に、当番年次を決め、其れを高一回卒からと定めた。役員人事も若返りを策すと共に、女子卒業生の出席を促すため女子副会長も就任させると言うような企画で進められたが、之亦すっかり定着して総会の会場も、現況では入り切れないほどになって、今後どうするか、嬉しい悲鳴である。本校同窓会のあり方を、浜北高その他でも取り入れて、年々盛大さを加えているようである。総会当番年次を決めた事の一番大きなプラスは、そのためにその前々年辺りから、再三会合を持ちお互いに同窓生の連絡親密化が倍加された事で、望外の収獲だと思っている。

卒業五十年の記念植樹も、継続されるであろう。母校に対しては、未だ未だやり残しの仕事が沢山ある。殊に開校五十周年記念事業として各位の御寄付を頂き、同窓会館建設資金として保有しているが本校の栗山が未解決の為、未だ目的に達成していない。当時の責任者として、申訳なく思っている。何れにせよ、地域の為に貢献される同窓会として、その発展を期すること切である。

わが年次

高校第一回生

龍泉　公

私共が入学しましたのは、初の東京奇襲空襲がありました昭和十八年四月です。卒業は複雑でして、昭和二十三年三月、見中二十二回卒業生として全員が卒業し、同年四月（卒業の翌月）約半数の者が新学制による高校三年に編入学し、翌二十四年三月、高校第一回卒業生として卒業致しました。二年生になりました昭和十九年の一学期に、学徒動員令により五年生（見中十九回）と四年生（見中二十回）の先輩が軍需工場等に動員され、二学期には三年生（見中二十一回）が動員され、私共は二年生で最上級生の任務を負う事になってしまいました。それも束の間、三学期の昭和二十年一月には、中泉・浜松周辺在住者が第一陣として、浜松市鈴木織機株式会社（現浜松東警察署）に動員され、先に動員されていた五年生の一部の先輩に合流したのです。後陣として日本楽器天竜工場、日本専売公社見付工場へと、次々と同級生は動員され、学校にはとうとう一年生だけが残留する事になってしまいました。私は浜松市鈴木織機株式会社に動員されましたが、そこでは対戦車砲弾を製造していました。荒削りから仕上げ、砲弾内部のくり貫き、薬莢接続部分のねじ切り等、鍛造前の全工程を分担しました。一般工員と同じスケジュールで就労していたのですが、その中から僅かな時間を生み出し、引率教官の恩師神田廉平先生は、数学と物理の授業を続けて下さいました。学徒動員に先立つ約一ケ月前の十九年十二月七日には東海大地震があり、日本楽器天竜工場が倒壊しましたので復旧作業に動員されましたが、交通機関が使えませんので、毎日磐田から天竜川駅横の工場まで歩いて通いました。食料事情の逼迫していた時でしたので、食欲旺盛な私共に動員軍需工場での労務終了後、メリケン粉を蒸して直径三糎、長さ十五糎に作った食物が支給されました。初めの中は稍黒砂糖の味がしてまあ食べられましたが、二十年の四月頃からはふすま（小麦を粉にする時に出る小麦の皮くず）で作ったとしか思えないひどい物になり、さすがの旺盛な食欲をもってしても受けつけ難い物になってしまいました。敗戦の色はこんな物にも表われて来たと言えましょう。そんな情勢の中で、米軍B29戦略爆撃機の空襲、グラマン・ロッキード等の艦載機の攻撃に私共の目の前で級友六名が空爆死したのでした。本年、卒業三十周年行事の慰霊祭で級友の霊を慰めることにしています。昭和二十二年夏（敗戦後二年目）、私共見中五年生の時、インターミドルで優勝。これが旧学制最後のインターミドルになりました。翌二十三年（私共高校三年生）夏、第一回インターハイで優勝。この時期が連続全国征覇と言われる時代です。この第一回インターハイの優勝から南高は通算四回全国征覇したといい、先のインターミドルの優勝は入っていないのです。連続全国征覇に活躍した陸上選手団の面々、陰で優勝を支えた人々、脳裏に刻まれています。いずれにしろ、此の時期（私共が見中五年、高校三年）を画して「水泳の見中」から「陸上の磐田南」に輝かしい変身を遂げたのです。

妄言多謝。

我ら高校第十回生

杉嶋　岑

多感な青春時代に同じ学舎に集うということは、ある意味で運命的な出会いともいえる。

昭和三十年四月に磐田南高の門をくぐったのは、総勢二百五十人。この同期の桜は、以後、同窓会活動においても、大橋孝久（評議員）君ら地元の世話役を軸に、横のつながり、団結が極めて堅固だ。

当時の校舎は、旧兵舎一棟を含んでの老朽化した木造、平屋建て。それだけに手造りのぬくもりもあり、昼休みなど窓から出入りしたり、相撲を取ったりするのどかさも見られたほど。受験戦争は、それなりに厳しかったとはいえ、お互いにライバル視したり、教師と生徒との間の〝断絶〟などは、思いも寄らなかった。「ヨッちゃん」「六トン」をはじめ、それぞれの先生方に〝献上〟した愛称で今でも慕う向きが多い。

高校10回生は、入試科目に英語がなかった最後の入学生だった。〝だからのびのび〟という訳ではないが、入試の時に不合格者が出たという話もついぞ聞かなかった。

入学当時の校長は、木原美義先生。ひげをたくわえられ、権威のシンボルのような真面目そのものの人柄を感じさせたが、磐田南に在学中のご令息が模試でトップになった日などは、一日中、機嫌が良かったというエピソードも伝え聞いている。

二年生の四月に校長は伊藤新七郎先生に代わられた。「徳不孤必有隣」といつも色紙にお書きになられていた。「戦後、教師は教育者であるよりも生活者になった」という感が深い中で、我が母校は、人格者の誉れ高い尾崎楠馬初代校長の精神が息づいていたのか、校長先生に限らず、諸先生方すべてが、教師イコール教育者に思えたのは、誇っていいことだと思う。

白線一本が入った今日の女子の制服も、高校二年の四月に決まり、街で見かけても一目瞭然、他校の女生徒と区別がつくようになった。当時の卒業アルバムを見ても、男子は押しなべて短髪に学帽、制服姿で、今日の高校生との時代の流れをつくづく感じさせる。

初めての体育の時間に「諸君、磐南に入学して私を知らない男子はモグリだ」と度肝を抜いた伊藤菊造先生の自負と情熱に満ち溢れた姿が忘れられない。その伊藤先生に率られた陸上部は、高校三年の第十回インターハイ（富山）で準優勝の快挙を遂げた。この時、長谷川順三君がハンマー投げで優勝、円盤投げでも入賞、小城興君が二百米ハードルに入賞、青島広司、平野隆の両君が八百米リレー優勝の立て役者として活躍した。見中時代の「水泳王国」に対し新制高校後の「陸上王国」の伝統を守ったといえる。我々は見中の大先輩たちの労作教育の遺産である「小田原山」で、しばしば上級生たちによる応援練習の〝シゴキ〟を受けた。

ところで、同期生に医者、研究者先生、マスコミ人が多いことに気付く。蛇足ながら同期生同士で結婚したカップルは三組ある。

思い出

見中第六回生

伊藤修二郎

見中初期は、もっぱら労作教育高揚時代であった。モッコをかつぎ鍬を振るい土手を築き、プールを堀り花壇をつくり、芝を植え、汗を出しての労働作業により人間造りがなされ同時に学校の美化が進んだ。私は自転車通学でしたが北西の寒い風の吹く冬に手袋無しでペタルを踏んで砂利道を通学した苦しかった思い出は今もってその道を通るたびに思い出している。

スポーツは好きで陸上競技部に入り心身を鍛練した。尾崎校長、小田原教頭の労作教育に順応してがんばったつもりである。然しながら勉学も共に両立とはいかなかった。スポーツ好きで勉強ぎらいのくせがついてしまったのではないかと今もって反省している。

その後九年間に亙り支那事変と大東亜戦争で戦ったが運よく生きのびた。十日食べずに南海西カロリンの無人島にかじりついたこともあり、広島で原爆の大ショックを受けたこともあり、その都度最後まで見中精神でがんばり抜くことが出来たと考えている。

今になって考えると見中時代に受けた教育や経験慣習が一生まつわり付いていて何か事ある時に見中精神が首を出すんだなと感じます。

見中第16回生

加藤芳朗

卒業後早くも37年余り、入学した昭和12年に日支事変、そして、5年生の昭和16年に大東亜戦争突入。軍事教練、ゲートル、巣挙手の礼はその象徴である。それでも卒業後の切迫した事態に比べればまだのんびりした時代で、9月の半ドン授業、夏用の霜降服と帽子の白カバーなども経験した。

生徒だけでなく先生方も共に尾崎精神を学ぶ場であった。朝礼、掃除、体操、作業、勤労動員など、すべて、先生方が率先して生徒を引っぱった。年輩の先生にはきつかったこともおありだったろう、と今にして想うのは申し訳ない。

石油危機の折から第二、第三の代替エネルギー論は花ざかりだが、もっと大事な第零のエネルギー、人力はあまり話題に上らない。在学時代はまさにこの人力が唯一の頼りだった。30分以内は徒歩、それ以遠は自転車通学、勤労作業の道具は鍬とモッコだった。先輩の汗の結晶は庭園、防風堤、プールとなって今も残っている。

終戦以後と比べて目立つのは、全国いろいろな地域出身の先生が多かったことである。あるいは鹿児島の、あるいは群馬の風習、産物の話を授業中に聞くことができ、遠州っ子の視野を拡げるよい刺戟を与えて下さった。

南高 第六回生

高橋廣治

南高卒業以来二十三年振りに、母校を訪れてみて、その変貌ぶりに驚いたものだ。三年間素足で歩いた板廊下の校舎も今はなく、夏の制服問題で、生徒係の先生を吊し上げた柔道場も当時の面影は全くない。その夏は、学校側の裁定に不服で、仲間数人と上衣を着用し続けた為に、汗で一着腐らせてしまった事等は懐しい想い出である。

母校が陸上王国の全盛期で、若い血を大いに湧き立たせたり、戦後間もない物資に乏しい頃で、親父の袴を引っぱり出して、急造の応援団を結成して、いさゝかの蛮風を味ってみたり、我が青春に悔いなしであった。

我々の世代は、母校創立以来、現在に至る中間の時期に当る訳で、学生気質も諸先輩に聞く質実剛健と現代の合理的精神の両面を併せ持っていた様に思う。

四年前の総会当番の折に、役員を中心に二十余名が揃いの浴衣で「かっぽれ」を踊って以来「かっぽれ会」と称して年次の世話係を果し乍ら、毎年酒を酌み交しては旧交を温めている次第である。

南高第十六回生

山本　賢

秋になると全校あげての体育祭が開催される。当時の体育祭には必ず〝ヤグラ〟がつきもので〝ヤグラ〟のない体育祭なんて、クリープのないコーヒーみたいなものだった。木材（丸太）をロープで組んで頭上3m位の所にオドリ場を作り、たくさんの生徒がこの上に乗り応援合戦を繰り広げた。当時の諸先生の神経の使い様は並々ならぬものであったろう。

丁度我々が三年生の時、我々の担任の先生が名誉ある生活指導係の役を引き受けられた。尊敬もし、いつも協力体勢を取ってきたが、〝ヤグラ〟廃止論には絶対納得できず、〝ヤグラ〟建設を成就させてしまった。担任の顔は丸ツブレ。

さて体育祭当日が来て〝ヤグラ〟の上にて各クラスの応援合戦がはげしい最中、当クラスは細工をした竹筒を〝ヤグラ〟の上にあげた。学年対抗リレーが始まる。ピストル係が「用意」という、とすかさず竹筒の2cm程の穴にマッチを擦って放り込む「ドン！」凄じい音である。ピストルが鳴ったと思って全力で走り続ける選手、途中で気が付き戻る選手、様々である。いたずらが過ぎ、天罰なのか一人タイミング悪く筒をのぞき逃げ遅れて、まゆ毛は半分飛ぶ、まつ毛も焦げ焦げ、これでは生活指導の先生も勘忍袋のオが切れる。あとはお決まりのコースと相なった。

誠に楽しい思い出である。

元教員生物担任　黒沢美房

私は昭和十七年より四十三年まで、生物教師として御厄介になりました。世は戦時中から戦後。学校は見中から磐田第一高等学校、そして磐田南高校。内容的には併設中学校、男女共学、夜間定時制、昼間定時制の併設など目まぐるしい変化の時でした。

見中に赴任した日、運動場に草一本無いといえる行き届いた清掃に先ず驚きました。本校先輩がオリンピックの水泳で優勝して得たというカシの木の鉢植えも強い印象でした。この先輩の活躍は本校生徒に努力目標を与え、自信を植えつけたと思います。戦後の陸上選手のインターハイの優勝も同様です。

戦時中の勤労動員で生徒に苦労かけた胸の痛み、戦後の文化祭で生徒が自主的に活動してくれたよろこび、野球部の顧問をした時先輩方の心からの御援助、母校出身の職員が大勢おられたが、私共のような外部から来た職員が働き易いようにと気を配って下さった御好意、併設中学設置の時は六年間も在学した学年があり、この人達とのおつき合いは、良きも悪しきも師弟互に知り尽くし、人生において貴いものでした。

便り

恩師

○皆川英夫（三代校長）
身辺無事であります。見付の御事なつかしきことも多くございますが次の記念式にはお伺いいたしたく存じます。みなさまによろしく申し上げて下さい。

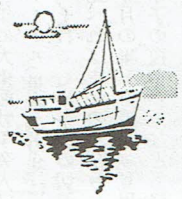
○中島常男（八代校長）
幸い、その後も至って元気です。週三日の短大（浜松）の講議のほかは盆栽と畠いじりの気まゝな毎日を楽しんでいます。時の流れの速さをしみじみと感じるこの頃です。

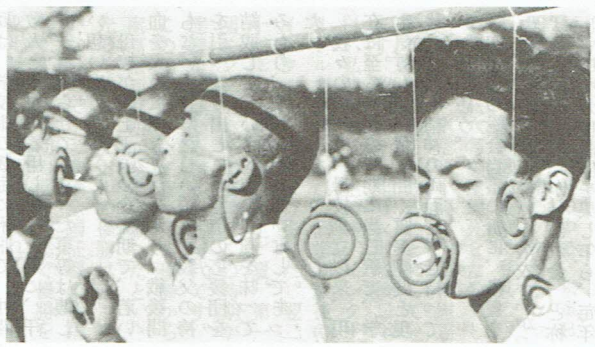
○上田一雄（数学）
昭和二年最初の奉職校として楽しい青春を過さして頂きました。小田原・吉岡将校・高柳・藤田・伊藤（平）・山下さんなど思い出されます。久留米大学で竹村さんと一緒でしたが早く亡くなられ残念です。現在は市の三大学へ出講し、二人だけの生活です。

○原田茂夫（英語）
昨年をもって大学教授を退きました。今は非常勤講師として日大文理学部の大学院と共立女子大学の大学院を教えて居ります。本年五月で七十一才になりました。

○中川　清（英語）
日大に講議に行っていると共に、国士館大学にも、特別客員教授として勤務しております。戦後と同時に磐田南高に勤務も長いこと致しまして懐しい思い出でございます。

○小林義直（英語）
先生方、同窓会の皆様、生徒諸君のますますの御発展、ご活躍をお祈りします。私も浜西高に漸く慣れてきました。南高の輝かしい伝統である質実剛健・自立・寛容の気風はすばらしいと思います。皆様によろしくお伝え下さい。





学校

○共通一次試験制度の初年度大学合格状況

昭和54年度大学別合格者数

国立大学 大学名	現	卒	計
北海道	1	1	2
岩手	1	—	1
東北	3	1	4
筑波	3	—	3
千葉	1	1	2
東京	1	2	3
東京農工	3	—	3
お茶の水	1	0	1
横浜国立	3	—	3
新潟	1	1	2
山梨	1	—	1
信州	2	1	3
浜松医科	1	0	1
名古屋	7	1	8
名古屋工業	1	0	1
京都	0	2	2
広島	3	2	5
静岡	38	12	50
（人文）	7	1	8
（教育）	16	5	21
（理）	3	0	3
（工）	11	4	15
（農）	1	2	3
etc			
合計	85	33	118

公立大学 大学名	現	卒	計
東京都立	2	0	2
横浜市立	2	—	2
都留文科	6	1	7
岐阜薬科	1	0	1
静岡女子	2	—	2
静岡薬科	3	1	4
神戸市外国語	1	—	1
合計	17	2	19

私立大学 大学名	現	卒	計
日本	25	9	34
中央	15	11	26
神奈川	19	3	22
立命館	15	7	22
法政	9	12	21
早稲田	10	8	18
明治	9	9	18
東京理科	9	8	17
国学院	9	6	15
大東文化	14	1	15
青山学院	9	4	13
慶応義塾	6	7	13
同志社	6	7	13
専修	6	6	12

私立大学 大学名	現	卒	計
東京経済	10	2	12
関西	7	4	11
工学院	7	2	9
東海	9	0	9
武蔵工業	7	2	9
名城	8	0	8
立教	3	5	8
芝浦工業	5	2	7
東京農業	6	1	7
岐阜教育	5	2	7
南山	3	3	6
愛知	3	3	6
明治学院	5	1	6
実践女子	6	—	6
文教	6	0	6
近畿	4	2	6
武蔵	2	3	5
名古屋女子	4	1	5
玉川	5	0	5
東京電気	4	1	5
二松学舎大	5	0	5
上智	1	2	3
駒沢	2	0	2
etc			
合計	383	165	548

事務局

○前総会以降の行事
8月　本部新役員会
9月　西遠支部総会　会長出席
10月　静岡支部総会　会長出席
11月　関東支部総会　会長出席（校長出席）
11月　本部新旧役員会
5月　学校後援会総会　役員出席
卒業五十周年記念植樹見中
第4回生、名簿用はがき郵送
6月　本部役員会　総会原案審議
名簿用返信はがきを年次へ
高19～27の新評議員会
7月　評議員会　総会議案審議
名簿原稿作成　各年次
機関紙原稿依頼
高19～27の年次別新役員会
名簿掲載広告の依頼
昼定の名簿作成準備
高校第10回生総会担当準備

○今年度の当番年次
10年会　南高第20回生
20年会　南高第10回生
30年会　見中第22回生
南高第1回生
40年会　見中第13回生
50年会　見中第4回生

○今年度の特記すべきこと
1.機関紙の発行
高校第1回生の龍泉副会長を編集長に創刊号を発行
2.役員組織の確立
高校第6回生の鈴木副会長を中心に卒業後十年以内（高19～高27）の役員組織を新しく再組織し、活動できる体制づくりをした。
3.名簿の発行
五年に一回の発行で今年は発行の年。より価値のあるものを安くをモットーに只今準備中

○今後の業務の重点
1.関西支部組織の再生をはかること。
2.年次では、高11～高18の役員組織が確立していないので実際に活動できる組織づくりを進めたい。
3.定時制卒業生の役員組織をつくり、部会および総会を開催する。

編集後記

創刊号をお届けします。機関紙の発行は長い間の懸案でしたが費用が捻出できぬまゝ今日に至ってしまいました。ご期待に添えたか心配です。ご寄稿賜りました諸賢に厚く御礼申し上げます。紙面の都合上筆を入れさせて頂きました。お許し下さい。発刊迄の企画・原稿依頼等在校幹事の池谷幸平先生のご献身に衷心より感謝申し上げます。続刊の紙面を飾る「思い出の写真」をお持ちでしたら本部にお貸し下さい。

龍泉　公